

に居城を築き、爰に居住すべき由なし。又赤松二郎政則は、長祿二年吉野より神璽を朝廷へ歸座なし奉りける功に依りて、寛正六年十二月廿六日赤松一松九十二歳にて元服し、將軍家の一字を賜はり赤松次郎政則と名乗り、加賀國石川・河北二郡并備前國新田庄等を賜はり、後從三位に叙し、幾程なく明應五年四月廿五日病死して、其の家漸に衰微せりと、伴信友が殘櫻記に見ゆ、その顛末は赤松再興記および南北朝記傳・續太平記・後太平記等に記載すといへども、政則越中に所領を賜はれる事もなく、また礪波郡五位庄内に居城を築き居住すべきよしなし。全く雲龍寺の俗説にて、證據なき傳説といふべし。

○塔頭慶全院

雲龍寺由來書に云ふ。塔中慶全院は、正保元年雲龍寺十代白翁和尚弟子息庭長老建立也。とあり。三箇屋版六用集に、塔中慶全院と載せたり。按ずるに、延寶の金澤圖に、雲龍寺門前と記し、十三間に十六間とありて、雲龍寺の横鶴林寺の門の向ひなる地也。此の地に慶全院を造立せしかど、明治六年無檀無住の寺院廢止の官令に依りて、塔頭慶全院

の號を廢し、右地所建物を共に賣却せり。故に今は俗家となれり。

○寶信山安樂寺

淨土宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開山等攝和尚、生國越前、瑞龍公御代脇田兵部儀、奥村伊豫取次にて、寺屋敷二百五十歩拜領、寺造立之處、其後奥村伊豫之菩提所永福寺地内百五十歩、伊豫へ相斷重而拜領致し、都合四百歩拜領地に被仰付。とあり。按ずるに、右開基檀那脇田兵部重季は、越前朝倉義景の家人脇田帶刀の男にて、重季も初め帶刀と稱し、義景に仕ふ。後越前府中にて利家卿に奉仕し、利長・利常卿に歷仕し、元和三年に致仕して、寛永元年九月廿五日八十歳にて歿す。

○萬松山永福寺

曹洞宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開闢越中國富山光嚴寺八世鄉雲札和尚開祖にて、天正元年開基奥村伊豫寺地拜領被致、寺創立。其後奥村因幡牌所に致し度山にて、伊豫納得之上兩家之牌所に罷成。とあり。故に舊藩中は奥村兩家より寺院の修繕をなし、本堂・客殿向は伊豫の

家より修理し、臺所・庫裏向は因幡の家よりなすを舊例とすといへり。因幡は二男家なる故也。按ずるに、當時の創立を天正元年と載せたるは書損なるべし。元祖伊豫守永福の建立にて、實名を以て永福寺と號す。但し伊豫守の實名は初め家福といふ。永福と稱せしは晩年の事也。奥村系譜に云ふ。伊豫守從五位下永福。初諱家富、以其先住筑紫福住。改富爲福。不敢忘其祖也。其後避將軍家諱。改家字爲永福。寛永元年六月十二日卒於加陽之宅。享年八十四歳。葬于野田之山。浮屠氏追稱永福院快心宗活。とあり。右系譜等に據りて考ふるに、永福寺の寺號は實名に依りて稱し、法名も實名と寺號とに據りて號したるものなりと聞ゆ。されば此の寺創立も永福晩年に及びての事ならんか。若し天正年中などの建立なる時は、奥村氏家福と稱し、永福寺と號すべきよしなし。

○藥師堂

永福寺の藥師と稱し、本堂の傍に堂宇を建て、諸人拜參す。此の藥師のみくじの藥とて、信徒へ御圖に任せ奇藥の法を授く。此の藥法は最早醫術の盡きたる長病人は、此の藥師

の佛前にて御圖を下し、圖に記しある種品をせんじ服するに、必ず奇効ありとて、諸人此の藥法を乞ふもの多し。若し本復得難き難治の病人は、其御圖に出る處の種品、必ず世に得がたき品而已なりといへり。按ずるに、此の藥師堂なる藥師は、大已貴・少彥名の兩神の御魂ならんか。此の兩神を藥師菩薩名神とも呼べり。文德實錄に、齊衡三年十二月戊戌常陸國上言。鹿島郡大洗磯前有神新降云々。時神馮人云。我是大奈母知・少比古奈命也。昔造此國訖。去往西海。今爲濟民更亦來歸。天安元年十月己卯。在常陸國大洗磯前。酒列磯前兩神。號藥師菩薩名神。と見え、常陸紀行に、大洗神社は本邦醫家の始祖たるべし。近時官醫那須氏の本朝醫談に詳かなりといへり。彼の兩神は日本紀神代卷に、大已貴命與少彥名命戮力。一心經營天下。復爲顯見蒼生及畜產。則定其療病之方云々。是以百姓至今咸蒙恩賴。とありて、今此の永福寺なる藥師の御圖に出づる藥法も、實に彼の神法といひて可ならんか。大同類聚方に云ふ。官府自古有神代之遺方三策也。今分立四方。任少彥名命之言而爲十二方。又一方則十三科具焉。上古之用藥唯三十七品而